

2018年10月 No36

巻頭エッセイ

「Sorrow」 (悲哀)

副理事長 小林征司

絵画や彫刻などについてはまったく造詣がなく、美術館はなるべく避けて通りたいほどの先天性美術音痴の私が、偶々（たまたま）本屋の立ち読みで開いた雑誌に載っていた一枚の絵に釘付けにされた。

ゴッホの作品だと書いてある。

低い台の上にうずくまるように座り、膝の上で両手を交差させ、その腕に額を乗せた裸婦を横から描いたものだった。その背には長く伸びた髪がだらしなく掛かり、垂れさがった乳房の下には明らかに身籠っていると分かる大きなお腹。どう見てもお世辞にも魅力があるとは言えないこの女のどこに惹かれてゴッホはこの絵を描いたのか。絵に対する強い好奇心とともに、ゴッホという画家にも興味がわいた。

そして一冊の美術評論の本の中にその絵の記事を見つけた。（瀬木慎一著「ゴッホ」）

それによると、ゴッホと女は教会で出会っている。女は年老いた母の他に、父親の分からぬ子供を一人かかえていた。その上女はまた身籠っている。その彼女にモデルになってもらうようにゴッホが頼み込んで描きあがった絵だという。そしてさらに驚いたことに後にゴッホはこの女の家に移り込んで同棲を始める。

誇り高い天才画家が世間から認められない焦りと苦悩。そして貧しさ。そんな中での狂気の沙汰ともいえるこの行動。

一方で凄まじいほどに荒んだ絶望的とも思える生活を送りながらも教会に通い続ける女。ゴッホは彼女に何を感じたのか、何を求めたのか？否、彼の魂はどこへ向かおうとしていたのか。

浅学菲才の身の私には手掛かりのかけらも見つからないが、想像を絶する重苦しい心の呻きが聞こえてくる。

うずくまる裸婦の絵の右下隅に、ゴッホは「Sorrow」と書き込んだ。

農園作業のボランティアさん 募集！

どんぐり工房は、成山で任海様からお借りした農園を耕し野菜や果実を栽培しています。この農園で、雑草刈りや収穫などの作業を手伝ってくださるボランティアさんを募集しています。毎週金曜日（午前）農園で作業ができる方です。詳しくは事務局まで。

障がい者雇用に関心を持って欲しい！

省庁・自治体 水増し雇用に関係者の怒り

「中央省庁・自治体の障がい者雇用率の水増し問題は、障がい者手帳を確認しなかったり、健康診断の結果をそのまま使ったりするなど、ずさんな算入方法が厚労省の調査で次々と明らかになった。」（読売新聞8/29）

この4月に「障害者雇用促進法」が改正され、企業や自治体が「雇用に努める対象」として、これまでの身体・知的障がい者に加えて新たに精神障がい者が加わった。これに伴って法定雇用率も2%から2.2%に引き上げられ障がい者の働く場が広がる、と期待されていた。さらに、国や自治体の法定雇用率は、企業より高く設定されていて障がい者の雇用拡大を積極的に進め、民間の取り組みを促進する役割りを担っていた。その中央省庁や自治体での「水増し問題」である。様々な波紋そして怒りが広がるのは当然である。

どんぐり工房でも、自立支援の目標として利用者の就労にも取り組んでいる。幾人もの利用者が、就労に結びついた実績もある。それだからこそ就労意欲を阻害するようなこの事態には無関心ではいられない。中央省庁における、約3500人分の不適切な計上が多く、障がい者の雇用機会を奪っていたこの問題の推移を、私たちは厳しく見届けて行きたい。

詩

「心の汗」

今日を精一杯生きるため
心に汗をかく
時々汗をぬぐいホッとしてから
さあ 行くぞ・・・と心動かす

止まったままの心では淋しすぎる
想いを優しくふるわせて
出来事を吸収する

その一つひとつが きっと
明日を生きるための
活力となる

作 とも



編集子雑感

実におかしなことではありませんか？民間企業では、障がい者の雇用率を達成できないと、足りない人数一人当たり、月5万円の納付金が課せられる。模範を示して雇用に積極的であるべき、政府省庁の大幅な水増しは、「文書改ざん」や「セクハラ」等、いい加減さをさんざん見せつけられてきた私たち国民に、「一体何を信じればいいのか？」と改めて考えさせます。秋です。爽やかさを心にも感じさせてほしいです。